平成 27 年度 岡山市埋蔵文化財センター講座

弥生墳丘墓の世界

安　川　　満

【講座の概要】

1, 弥生墳丘墓とは

弥生墳丘墓とは弥生時代の盛土や墳丘をもつ墓を前方後円墳に代表される古墳と区別する呼称です。弥生墳丘墓が出現するのは前期中ごろの畿内のようです。当初は、墳丘の中に多数の埋葬施設があり、「家族墓」的なものでした。しかし、墳丘を持った墓に葬られる人たちとそうでない人たちの「区別」や「格差」が現れてきているといえます。

墳丘墓の中で少数の埋葬が卓越してくるのは弥生時代後期後半です。また、このころから墓制の地域色が非常にはっきりしてきます。これは権力者と言える人物が現れてくることと同時に墓制を共通する地域的なまとまりがはっきりしてくることを示しています。

2, 弥生墳丘墓の特色

弥生墳丘墓の特色は、なんといってもその地域色にあります。吉備の特殊器台や山陰の四隅突出墓など使用される土器や墳丘の形態などに強い地域的まとまりとほかの地域との違いが表れてくるのです。これらは単に風土や流行ではないと考えられます。近藤義郎はこの背後に同族意識に基づく墓制を共通する地域的なまとまりがあると考え、その関係を「擬制的同祖同族関係」と呼びました。このまとまりこそ、後の時代に吉備や出雲と呼ばれる、あるいは魏志倭人伝の伊都国、投馬国といった「国」にあたるものと思われます。

3, 弥生墳丘墓と前方後円墳

弥生墳丘墓は前方後円墳に代表される古墳と区別するための概念だと述べましたが、そこには様々な議論があります。古墳は－個々の古墳には当然、個性や地域色がありますが－前方後円墳に代表されるように汎列島的な共通性が特徴といえるでしょう。「擬制的同祖同族関係」が地域を超えて拡大した姿といえます。都出比呂志はこれを「前方後円墳体制」と呼び、古代国家の萌芽と考えました。

一方で、弥生墳丘墓にみるような「格差」や「地域性」の出現に大き画期を求める意見もあります。さらに、「纏向型前方後円墳」のように定形化した前方後円墳の誕生以前に地域を越えて共通する墳丘形態が拡がることを指摘する意見もあります。

また、「纏向型前方後円墳」のような、定形化した前方後円墳の要素はそろっていないものの、前方後円形の墳形やある程度の汎列島的な関係の成立が読み取れるものを、弥生墳丘墓と呼ぶべきか古墳と呼ぶべきか、も大きな問題です。

【参考文献】

近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店

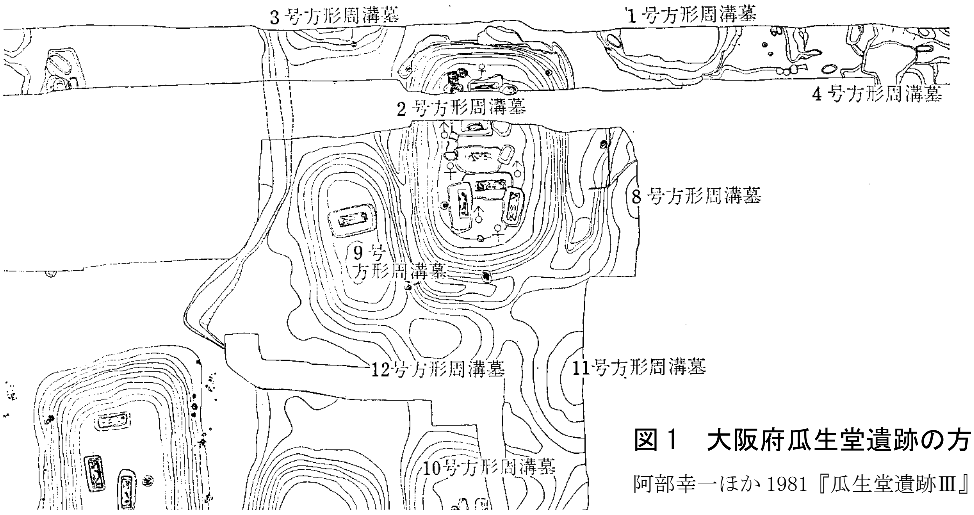


図1　大阪府瓜生堂遺跡の方形周溝墓

阿部幸一ほか 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会

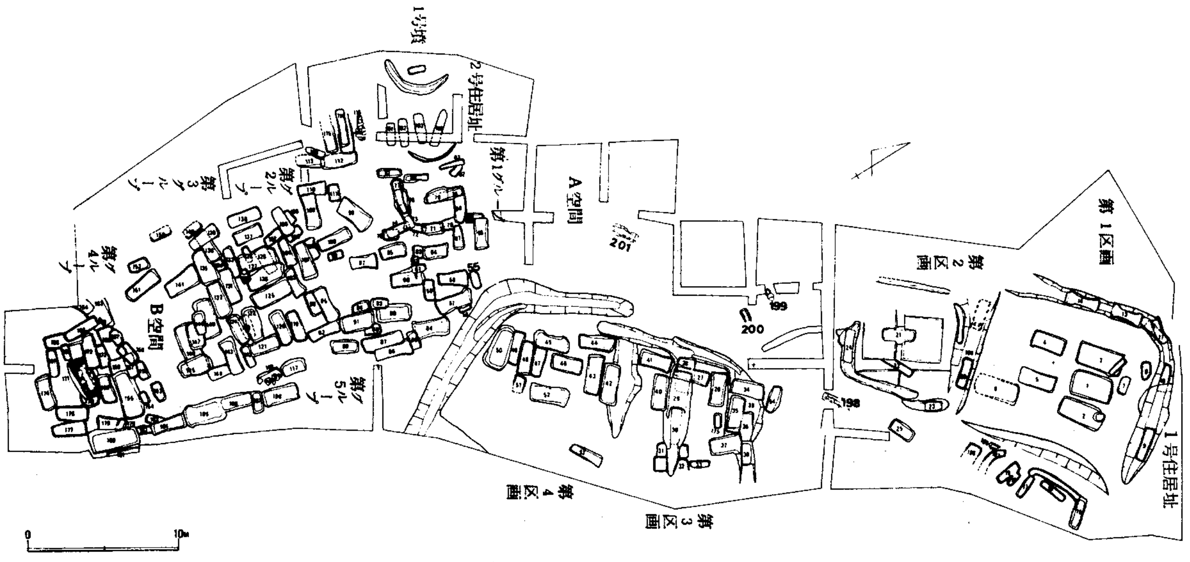
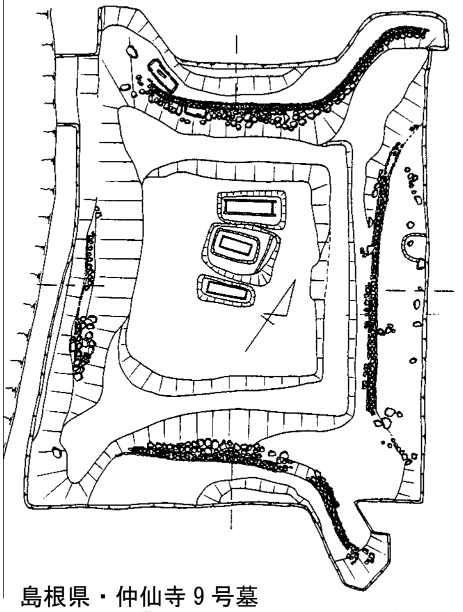


図2　真庭市中山遺跡の墳丘墓（方形区画墓） 山磨康平ほか 1978『中山遺跡』落合町教育委員会

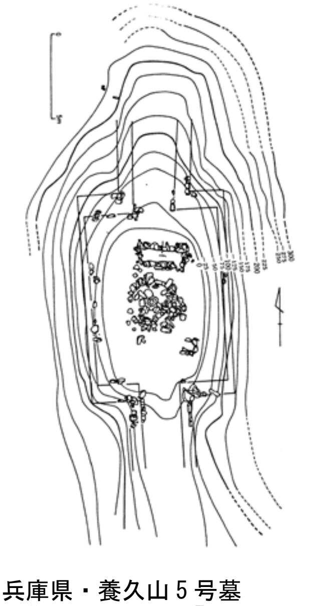
香川県・鶴尾神社4号墳

真鍋昌宏 1983「鶴尾神社4号墳」『香川の前期古墳』



島根県・仲仙寺9号墓

近藤正 1973『仲仙寺古墳群』安来市教育委員会



兵庫県・養久山5号墓

加藤史郎ほか 1985『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会

図3　各地の弥生墳丘墓

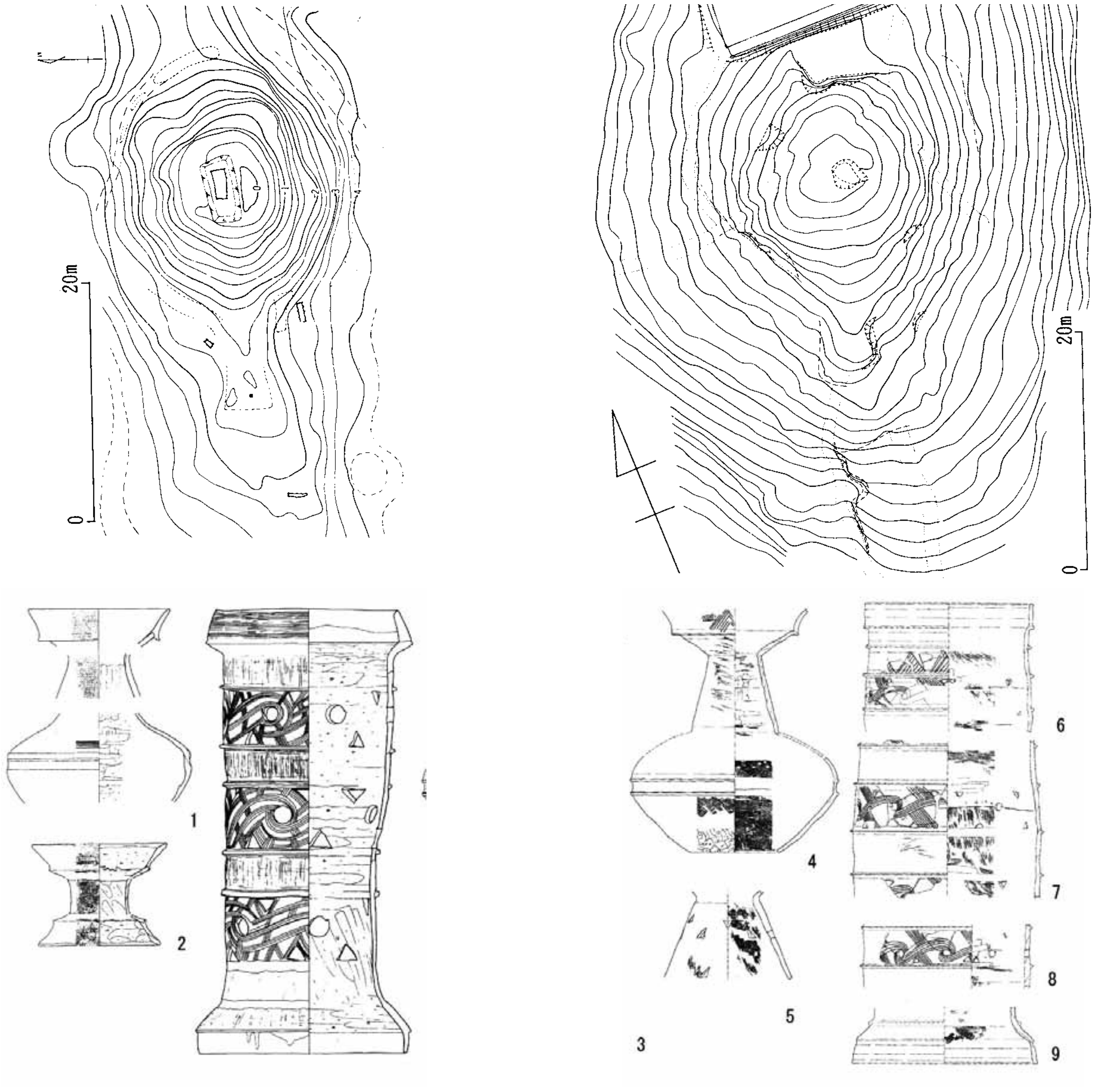


図４　総社市宮山弥生墳丘墓（左）と岡山市矢藤治山弥生墳丘墓（右）

図５　纒向型前方後円墳の分布と纏向古墳群

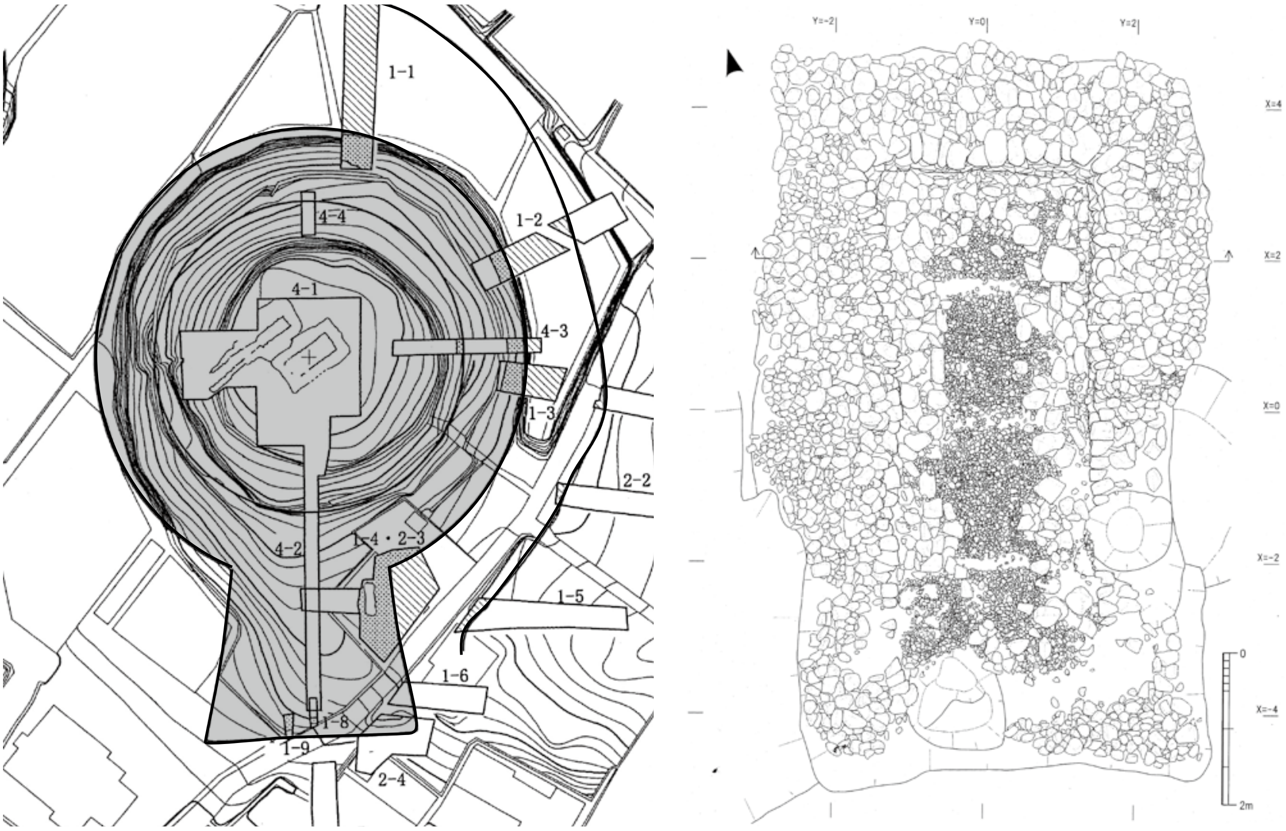


図７　ホケノ山古墳の墳丘と埋葬施設

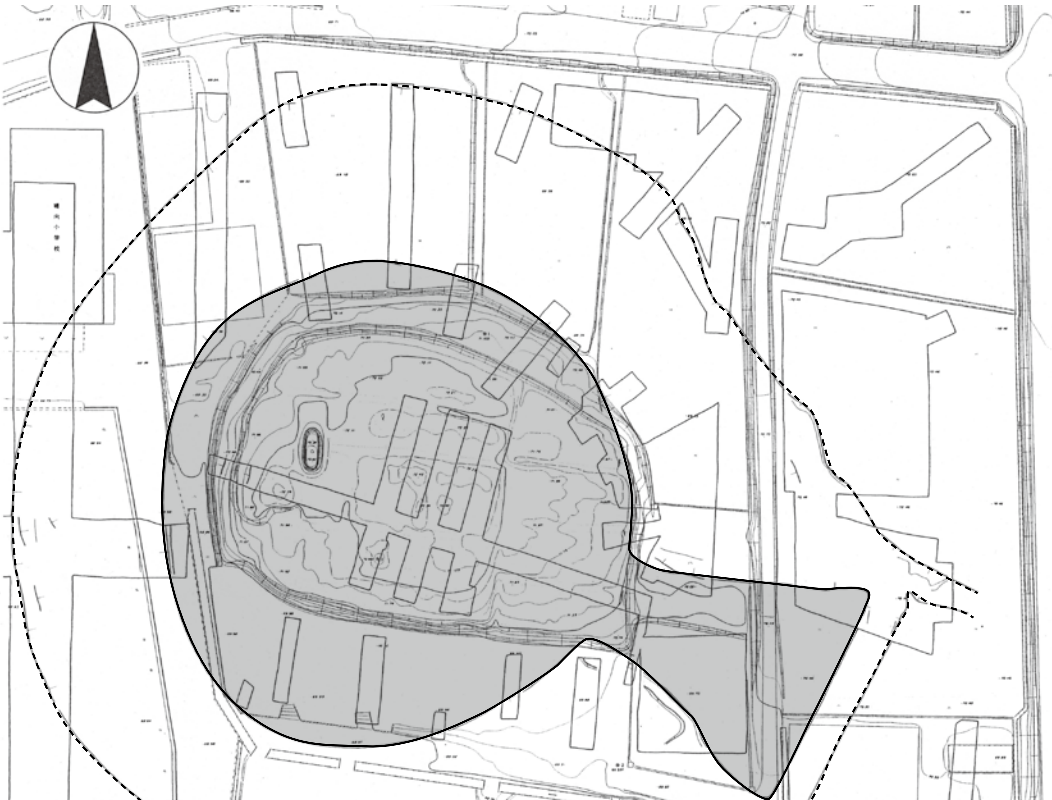


図８　纒向石塚古墳の墳丘